

伝えたい

# まちの遺産

美しい自然とさまざまな歴史文化遺産を持つ南越前町。先人の豊かな感性とたゆみない努力によって築かれたこれらの歴史は町の財産です。このコーナーでは町の歴史や文化をご紹介します。

【歴史の道】南越前町は、古くから北陸と京の都、あるいは越前と若狭を結ぶ陸路、海路の要衝でした。

陸路では、北陸の幹線道である北陸道（北国街道）をはじめ西街道（馬借街道）、朝倉街道などの道路網が整備され、海路では、越前国府から敦賀湊までの中継点として河野・今泉浦、甲楽城浦などを利用した海上交通が開けていきました。

それら様々な交通網の発達により、街道沿いには今庄、鯖波、脇本といった宿駅が整備されるとともに、国境（郡境）には番所が置かれ、当時の面影を残す旧所・名跡が数多く残っています。



▶木ノ芽峠に残る北陸道の石畳

【町並み】江戸時代に宿場町として栄えた今庄には、参勤交代などで大名が滞在した本陣跡や旅人が宿泊した旅籠、問屋、酒屋などの家々が点在し、旧街道の両側には深い軒や袖壁、格子などの伝統的な表構えを持つ町屋が南北約1.5kmにわたって軒を連ねています。また、日本海5大船主ともいわれた右近家や中村家をはじめ、多くの船頭や水主を輩出した河野集落でも、旧道沿いには北前船主邸や土蔵が残り、北前船廻船稼業で繁栄した河野浦の様子がうかがえます。



うかがえます。

【城跡】城跡というと松山城や燧ヶ城などが有名ですが、町内では18力所の城跡や館跡が見つかっています。合戦が起こるたびに軍事上の要となる位置や、街道・峠・国境を押さえられる場所を選んで築かれました。これらはほとんどが山中に築かれた山城で、福井城や丸岡城のように天守閣を持つ江戸時代の城よりも古い時代の城跡です。



## 和の風 町長随想

増澤 善和

### 「坂尻峠」今昔

所（幕府や各藩からの命令）もあつたようだ。

平成十五年八月、当時の今庄町長沢と南条町中小屋間に「山トンネル」「新長沢橋」が完成し、町村合併の先駆シンボルとなつた「たくら街道」が開通したのである。この道の歴史的情念について述べてみたい。このトンネルの上にあつた坂道「坂尻峠」（中小屋坂・宅良坂とも）は、昔から多くの人たちが利用した峠道であつた。秋には福井藩や鯖江藩への年貢米俵を背にした牛の行列が、田倉川を渡り坂尻峠を越えたと伝えられる。夏の五分市本山詣りには、この峠と次の牧谷坂を利用して。さらに、視野を拡げて見ると、瀬戸から高倉峠を越えるのと美濃（岐阜県）に通じ、郡上藩の殿様が、高倉峠と坂尻峠を越えて藩領の上野に來られたと伝えられる。また、柚木俣から池田の東侯に通じる大阪峠（現在の国道四七六号）は水戸浪士が通つた道でもある。こうみると、坂尻峠のある長沢は多くの人々が行き交う所となり、高札

さて、この坂尻峠の下にトンネルを掘る計画を最初に立てられたのは、終戦直後の宅良村長・故神谷千代治氏（長沢・坂尻）であつた。神谷氏は当時の薩摩雄次代議士とともにこの峠に登り、このトンネルの必要性を陳情されたと聞く。また、中小屋の野村新氏や阿久和の故嶋崎小助元町議など南条側有志の応援もあつたが、薩摩代議士の急逝などで村長存命中にトンネルは実現できなかった。神谷村長の遺志を継がれた次男和夫氏は、県道中小屋武生線を長沢まで延長の陳情を続けられ、歴代今庄町長のご努力もあつてついに平成十五年トンネルが貫通し、神谷父子二代、六十年の夢が実現した。開通式に、和夫氏が父の遺影を胸に出席された姿が今も忘れられない。神谷村長と同郷で親交のあつた敦賀市の伊藤助春氏（飯田義基編集「私達の郷土・宅良の里」の中で坂尻峠の思い出を書かれている）も、和夫氏の案内で現地を見学、感涙を流されたと聞く。